

〔論文〕

「文章を書く力」をめぐる課題と指導

— 大学一回生の作文分析から —

宮 崎 加代子*

本論文は、大学生の読み書き能力の低下が問題視されている中、「文章を書く力」の向上に向けて、その実態を明らかにし分析考察したものである。

大阪府下の私立O大学一回生を対象に小論文を書く力に関する実態調査をした結果、次のようなことが明らかになった。

- ・語彙や文法、表記、書き言葉と話し言葉の乱用等の日本語についての基礎知識に乏しく、適切に言語を運用する力が乏しい。
- ・相手や目的意識を持って筋道立った文章が書けない。
- ・文章の要約や文章構成が不十分で、記述量が少なく指定された字数で文章が書けない。

など、様々な課題があることが分かった。

これらはいずれも文章を書く上で基本的な事項であり、小学校、中学校、高等学校にかけてくり返し学んできているはずである。にもかかわらず、定着できていないことになる。

今後、それらの事項について、一層の定着を図るための手立てを講じることで「文章を書く力」の向上に繋がっていく。指導について、具体的な手立てを工夫し、実践を通してその有効性を検証することが課題である。

キーワード：「文章を書く力」に関する実態調査、要約力、文章構成力

I はじめに

大学生の読み書き能力の低下が問題視されるようになって久しい。多くの大学で、特に初年次教育の一環として、学生の日本語による読み書きの力を養成する授業を設けるようになってきている。O大学では、ここ数年は日本語検定の実施を始めており、また、キャリア支援の時間には、日本語検定合格に向けて、授業の取り組みも実施している。更に、今年度から総合基礎演習（一回生のゼミ）の時間に、15分間ではあるが小テストを実施し、学生の基礎学力向上に向けての取り組みも行っている。基礎学力の根底には、読み書き能力、国語力が求められる。国語科は全教科の基礎でもあるからである。

O大学は保育園・幼稚園・小学校の教員を養成する大学であり、日本語を正確に理解し運用できる力や正確に丁寧に整った文字が書けたり筋道だった文章が書けたりする力は必要不可欠であると考えられる。

また、教育現場では、教員は目の前の子どもと関わるだけでなく、保育日誌や連絡帳、

*大阪総合保育大学 児童保育学部

学級・園だよりなど多種多様な文章を作成することが重要な業務の一つとなっている。

教員と保護者の通信である連絡帳を例にとってみると、伝えるべき事柄が的確に分かりやすく表現できていないために、保護者の不信感を招くこともある。それが、ひいては学校教育に対する信頼感の欠如となっていくことも考えられる。

そのため、教員を目指す学生にとっては、その業務に耐えるだけの「文章を書く力」を身に付ける必要がある。

「文章を書く力」の乏しさについては、相手や目的意識をもって、筋道だった文章が書けないこと、語彙や語句の乏しさ、表現力、主語や述語がかみ合った文章が書けないこと、敬語の使い方が出来ていないこと、漢字を含めた誤字・脱字が多いこと、書き言葉と話し言葉の区別がつかないこと、求められた字数で書くことが出来ないこと等、考えられる問題は多岐に渡り、一つには絞れない。

しかし、正確で筋道だった文章が書けないということは、文章表現力を支える思考力の問題でもある。物事を分析・推察・統合・抽象・比較・関係づけたりする論理的思考力や推察する力や洞察する力は「文章を書く力」に大きく起因するものであると考える。

以上の問題意識に立って、今後、教員を目指す学生が相手や目的意識を持って、正確で筋道だった「文章を書く力」、論理的な記述力についての伸長を図っていくための方策について考えてみたい。

まず、実態把握のために、1600字程度の小論文を読んで200字程度の要約文を書く。更に読んだ小論文について600字程度の意見文を書くという課題を設定した。この課題についての解答文を分析し考察を加える。この調査にあたっては、私立〇大学一回生120名を対象とする。

要約文に視点を置く理由は次の通りである。堀江祐爾は、要約の学習の意義について、「その文章や話を全体としてとらえることができなくては、本当に理解したとはいえないであろう。文章や話を全体としてとらえるためには、筆者や話者がどういうことを述べようとしているのかを、しかも的確に把握できなくてはならない。大意なり要旨なりにまとめる力、全体の見通しを持ち概括する力、すなわち要約力が必要となるのである。」⁵⁾と述べている。また、「読み聞きした内容を他人に伝えるときも要約力は不可欠のものである。読み聞きしたことの全部を伝えることは困難であるし、またその必要がない場合が多い。要点だけをかいつまんで、人に伝える能力が求められる。したがって大きくいえば、要約力は社会生活を営むうえでの基本的な能力の一つである。」⁵⁾と述べている。このように要約力は大学生にとって、是非とも身に付けなければならない力と考えるからである。

また、意見文に視点を置くのは次の理由による。意見文は、ある物事の事態・見解などについての考えを、根拠を明確にして論理的に述べ表した文章である。したがって、意見文を書く時は、はっきりとした自分の意見を持ち、それを読み手にわかりやすく展開することが必要である。相手を筋道立てて説得し、納得させるような文章が求められる。また、論理的に述べるための道筋としての文章構成も大切である。したがって、このような力も学生には是非とも身に付けて欲しいものである。

これらの理由から、学生の要約文や意見文を分析し、課題を見つけ、「文章を書く力」の伸長を図っていくための方策について考えてみたい。

Ⅱ 研究計画

- 1 年次・・・○ 正確に文章を理解し、表現する能力の実態を把握し、その分析をする。
 ○ 問題点を見つけ出し、その解決に向けて指導の手立てを考える。
 2 年次・・・○ 1 年次の実践をした結果、「文章を書く力」がどのように伸びたか、指導方法や手立てが有効であったか検証しその概要について報告をする。

Ⅲ 大学一回生の「文章を書く力」の実態と分析

1 大学一回生の「文章を書く力」に関する調査の概要

(1) 調査の目的

大学一回生の作文を通して「文章を書く力」の実態を把握し、問題点と解決の糸口を見つけ、「文章を書く力」の向上に向けて指導の手立てを探る。

(2) 調査対象

私立 O 大学一回生 120 名

(3) 調査日 平成 26 年 7 月 21 日

(4) 調査内容

O 大学一回生の「文章を書く力」について実態を把握するため、1600 字程度の小論文を読んで 200 字の要約文を書く。更に読んだ小論文について 600 字の意見文を書く。それらを観点別に分析をする。その結果は表 1・表 2・表 3 の通りである。

表 1 「小論文」の要約文（200 字）についての観点別分析表

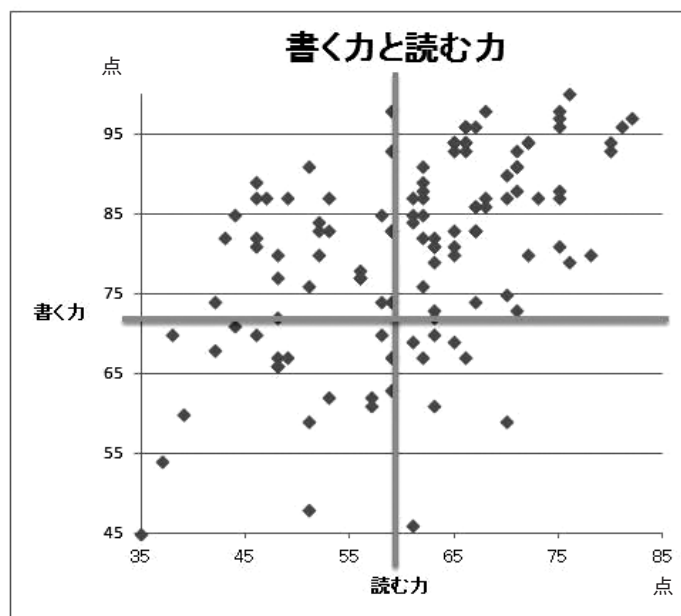
内 容	正答率 (%)
① 要約はできているか。(以下の事柄が文脈で押さえられている)	78
・ 幼少時の遊びについて日本と欧米のちがいが。 ・ 幼少時の遊びは個性や創造性に大きく影響する。 ・ 問題解決につながる知恵は自由な遊びが土壌である。 ・ 国際競争に打ち勝つためには、大学教育の充実より 子ども時代の自由で豊かな遊びの保証からはじめねばならない。	
② 字は丁寧か。誤字・脱字・句読点の誤りはないか。	87
③ 指定された字数を守って書いているか。	94

表 2 「小論文」について自分の考えを述べる（600 字）についての観点別分析表

内 容	正答率 (%)
① 論理が展開できているか。	73
② 自分の意見（結論）がはっきりしているか。	81
③ 根拠は具体的（数値・体験・見聞）か。	78
④ 段落はできているか。(一段落一内容)	73
⑤ 接続語・指示語は適切に使っているか。	94
⑥ 書き出しの 1 字下げはできているか。	95
⑦ 指定された字数を守って書いているか。	45

⑧ 字は丁寧か。誤字・脱字・句読点の誤りはないか。	90
⑨ 原稿用紙の使い方は正しいか。	98
⑩ 文体は常体で統一されているか	72

表3 文章を読む力と書く力のクラスター分析



2 調査結果の考察

(1) 表1「小論文」の要約文(200字)についての観点別分析表

要約については、『小学校学習指導要領解説国語編』の「読むこと」の領域の第5学年・第6学年の目標では「目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。」¹⁾や説明的な文章の解釈の指導事項では「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」¹⁾と示しており、また、『中学校学習指導要領解説国語編』の「読むこと」の領域の第1学年の文章の解釈の指導事項では「文章の中心的部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。」²⁾と示している。このように要約は「読むこと」の指導事項に示されているが、要約作業は書く営みであり、要約力は理解力であるとともに表現力でもある。

小田迪夫は「要約のためには、語句と語句の関係、文の組み立て、文と文のつながり、段落相互の関係、さらに文章全体の構成をふまえて総合的に文章を理解する必要がある。その上に理解内容を抽象化して表す表現力が要求される。その意味で要約作業は抽象的理解力と抽象的表現力を養う訓練になる。」⁴⁾と述べている。

要約が出来ていると判断した学生の解答文を取り上げてみると

自由な遊びは個性発現の温床である。小さい頃の遊びほど自由度の高いファンタジーと結びつく。しかし、大学生になると構造化された遊びとなる。幼少時の自由な遊びが、発想の豊かさ、個性を伸ばすのに役立つ。「遊戯療法」から分かるように、「自由な遊び」とは特効薬なのである。そして、その「自由な遊び」こそが問題解決にもつながっていく。日本の教育の改変を考えるなら、子ども時代の豊かな遊びの保証から始めるべきである。

下線を引いている文章は抽象的表現であると捉えられる。また、課題文の各段落の要点を取り上げているし、筆者の主張も記述されていてまとまっている。

一方、要約が不十分で出来ていない学生22%の解答文を見ると（例1）や（例2）に示すようなものが見られる。

（例1）

日本と欧米の教育を比べると、欧米では子どものときには自由に遊んで、大学になると急に学ぶことが増える。これに対して、日本は子どもの頃は勉強々々と言われて、大学になると遊びだす。日本の教育は決められた正しい答えを早く知ることを幼少期から訓練されるため自分の考えを自由に伸ばして創造性を発揮することはほど遠くなる。このことから、幼少時の自由な遊びが、その人の発想の豊かさ、個性を伸ばすことに役立っている。

（例1）については、日本と欧米の教育の違いについての段落のみ具体的に記述している。事実や出来事の付加的な部分を書いていて、筆者の主張が読み取れていないためまとめや結論が書けていなくまとまっていない。

（例2）

とりあえず、日本の教育を見直すべきで、日本の教育を見直すということは幼少期の遊びを見直すということである。日本は小さい頃に勉強・勉強と言われて肝心な年齢になった時（大学生）に遊び出すのである。それじゃあ欧米などに遅れを取るに決まっている。遊びというのはものすごく大事で不登校の子どもやチック症状のある子どもに対しても、心おきなく遊ぶのが有効といわれる程である。幼少期を考えることは未来を考えることである。

（例2）については、下線部は具体的な記述である。筆者の主張を述べている中心段落がつかめておらず、また、キーワードが押さえられずに勝手に文章を作り出したり、書き言葉の中に話し言葉が入ったりしている記述である。

200字の要約文であるため、ほとんどの学生は字数を守って書いていた。また、字も丁寧に書けていたし、誤字・脱字も少なかった。句読点が行のはじめにきていて原稿用紙の使い方ができていない学生がわずかながらいた。

『高等学校学習指導要領解説国語編』において「国語総合」の文章の解釈においても、要旨・要約について触れている。このように、学生は要約については、小学校、中学校、高等学校にかけて学んできているはずであるが、書くことの体験や書く回数について、時間をかけて取り組んで来なかったのかも知れない。調査日（7月21日）に高等学校時代に国語

の授業や国語以外の授業で、まとまった分量の文章（400 字程度）を書いた経験があるかについて学生から聞き取ったところ、約 40% の学生が書いていないと答えていた。書いたことがあると答えた学生でさえも、大学入試のために書いたのが本音であった。

（２）表 2 「小論文」について自分の考えを述べる（600 字）についての観点別分析表

表 2 の観点別分析表から、特に正答率の低い項目を取り上げて分析をしてみた。

まず、①論理が展開できているか。で 27% の学生ができていない。論理が展開出来ている作文は次のような視点で記述されているかどうかで判断した。

まず、課題文の筆者の意見に対して、自分自身はどう考えるか。筆者の意見に共感するのか、違和感や反発を持っている立場なのかを明確にして書いているか。

次に共感する根拠や違和感がある根拠を、自分の体験や知識の中から見つけ出しているか。論理的に筋道立った文章を書くための文章構成が「序論・本論・結論」「起・承・転・結」のような型になっているか。そのための接続語を効果的に使って、論理の流れを作っているか。等である。

出来ている学生のほとんどは、筆者の論に賛成の立場から幼児教育の哲理が含まれ、筆者の主張や自分の体験、他の学習で得た理論を取り入れながら肯定的に論を展開している場合が多く見られた。筆者の考えに違和感や反発の立場で書いている作文は見られなかった。また、出来ていない学生については、筆者の論に反対はないが、論が展開できていないため何を言っているのかわからない。幼児教育のあり方を理解していると思われるけれども表現力が不足しているため、自分の考えを論理的に展開できていないのが目立った。自分の考えをうまく表現できないということは、文章表現の経験不足や読書体験不足があると推測される。作文を見てみると 68 人（57%）が頭括型の文章を書いているが、具体的な事例が無く結論もはっきりしていない文章であった。

小学校、中学校、高等学校の『学習指導要領国語科編』の「書くこと」の領域には段階を追って記述についての指導事項が示されている。中でも中学第 1 学年の記述指導では「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちについて根拠を明確にして書くこと。」²⁾と示している。

次に、④段落について出来ていない学生は 27% いる。⑥書き出しの 1 字下げは、95% と良く出来ているが、その後の段落が出来ていない。600 字の意見文であれば、起承転結のような形でかけば書きやすく、4 つぐらいの段落はできる。筆が止められずに一気に書き上げてしまうことも考えられるが、最近の若者の傾向として、親しい友人や家族間で携帯電話等のメールのやりとりが気軽に行われているためか、あまり段落を意識して文章を作成していないのではないかと推測する。書き出しの一字下げができていない学生は段落もできていない。

段落については、小学校の第 3 学年で学習する。『小学校学習指導要領解説国語編』では、小学校第 3 学年及び第 4 学年の「書くこと」の領域の目標に「相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書こうとする態度を育てる。」¹⁾と示されている。

また、『中学校学習指導要領解説国語編』の「書くこと」の領域では、中学第 1 学年において、指導事項の構成や推敲のところで「集めた材料を分類するなどして整理すると

もに、段落の役割を考えて文章を構成すること。」²⁾「書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して読みやすく分かりやすい文章にすること。」²⁾と示されている。小学校・中学校の国語科「書くこと」の指導の中で学んできているはずだと思うのだが、その意識が薄れてきているのではないかと考えられる。

更に、⑦指定された字数を守って書いているか。については、限られたスペースの中にまとまった文章がどれだけ書き込むことができるかということも表現力を身に付ける上で大事なことである。また、指定された字数は600字であるので500字～600字までの字数で四捨五入法を採用して560字まで書いていけばよいとみなした。しかし、その字数まで書ききれていない学生が55%もいる現状である。このことは、事実や体験・見聞等を入れて論理的に文章構成ができていないということが考えられる。

記述量を増やすためには、情報を取材する段階で書く事柄を収集したり、全体を見通して事柄を整理したりすることが求められる。

その他、特に気になった文章では「なので」「ですので」「ですが」と言った話し言葉が入り交じって書いている学生が少人数ではあるがいた。また、敬体と常体が入り交じり統一できていない文章を書いている学生もいた。

(3) 表3 文章を読む力と書く力のクラスター分析

O大学一回生の文章を読む力と書く力について、表1・表2の観点別分析表をもとに、一人一人の「要約の各項目の点数」「小論文の各項目の点数」を集計し、クラスター分析を試みてみた。

・よく読めるしよく書ける学生 ・読めるけれども書けない学生 ・読めないけれども書ける学生 ・読むのも書くのも苦手な学生の分布図を作成してみた結果、表3のような分布図になった。

この分布図をみると、よく読めてよく書ける学生が約49%、読めるけれども書けない学生が約8%、読めないけれども書ける学生が約25%、読むのも書くのも苦手な学生が約18%の割合になっている。

これらの結果から、読む力を伸ばすことによって、書く力も伸びていくのではないかと考える。今後は文章を読んで理解する力を高めていく指導と理解したことを文章表現に生かす指導が求められるのではないかと考える。

3 課題解決に向けて

教員を目指す私立O大学一回生の「文章を書く力」について、小論文の解答文を手がかりとして実態調査をしたところ、上記のような様々な問題点が浮かび上がった。

「文章を書く力」を育てるには、書く事柄を収集し取り入れた事柄について整理し、段落意識を持って文章構成を考える。更に、定められた字数内に収めるようにする。などの課題があることが分かった。また、自分の意見や主張をはっきり持って、筋道の通った文章構成で論理的な記述が出来るようになることや多様な文章形式にも慣れて書けるようになることなども今後の課題である。

しかし、これらの課題は、小学校から中学校、高等学校にかけて学んできたにもかかわらず定着できていなかったものであることが明らかになった。

これから先の卒業論文や教員採用試験・就職試験に向けての対策には、この課題を避けて通ることができないだろう。課題解決に向けて、今後どのような指導の手立てが考えられるか提案したい。

(1) 学生の意識を変えることから

学生は、将来、保育園・幼稚園・小学校の教員になる志を持って、大学に入学してきているはずである。そのことを再度自覚させる。また、保育園・幼稚園・小学校の教育現場では多種多様の文章を作成することが求められ、それは業務の一つでもある。だから、文章を書くことは苦手であるとか整ったきれいな文字が書けないではすまされないことも強く指導したい。

○大学では、一回生から四回生までキャリア支援の授業がある。一回生のキャリア支援の授業内容の一つに「日本語検定」に向けての授業がある。その授業の一回生 130 名の「日本語」についての意識アンケートの調査結果（6 月実施）を見ると

○日本語の使い手として、日本語の基礎知識は

ある（6.2%） まあまあある（55.8%） あまりない（38.0%）

○日本語の使い方について

意識している（7.0%） まあまあ意識している（44.6%）

あまり意識していない（45.4%） まったく意識しない（3.0%）

という結果である。

上記の結果を見ると、日本語の基礎知識や運用力について今まで以上の意識を持って取り組ませる必要があるだろう。

(2) 授業の改善—国語科を中心に取り組む

すでに授業設計はあるが、更に改善すべき次の 4 点を視野に入れて取り組む。

① 毎回 10 分程度、日本語の基礎知識についての小テストを実施する。

授業到達目標として、国語科についての基礎知識を理解し幅広い言語活動ができようにする。と掲げている。

「日本語」についての意識アンケートからは、次のような結果がでている。

○敬語 内容を人に説明できる（4.6%） 大体理解できている（72.1%）

あまり理解できていない（23.3%）

○文法 かなり詳しい（3.9%） まあまあ知っている（55.8%）

あまり詳しくない（40.3%）

品詞 区別できる（6.3%） まあまあ区別できる（44.5%）

あまり区別できない（49.2%）

用言の活用 活用できる（11.6%） まあまあ活用できる（45.8%）

あまり活用できない（42.6%）

○語彙 語彙数 多いと思う（7.7%） まあまあ多いと思う（41.9%）

あまり多くない（50.4%）

対義語や類義語 よく知っている（3.9%） まあまあ知っている（55.5%）

あまり知らない（40.6%）

- 言葉の意味 よく調べる (15.5%) まあまあ調べる (44.2%)
 あまり調べたことがない (40.3%)
- 表記 (送り仮名や仮名遣い) 間違えることはない (4.8%) まあまあ正しい (73.6%)
 あまり正しくない (21.6%)

○漢字

- 教育漢字 書ける (20.7%) まあまあ書ける (45.4%)
 時々間違う (26.2%) よく間違う (7.7%)
- ※教育漢字 (義務教育期間での学習漢字 約 1000 字)
- 常用漢字 書ける (14.6%) まあまあ書ける (44.6%)
 時々間違う (33.1%) よく間違う (7.7%)
- ※常用漢字 (日常使用の漢字 約 3000 字)
- 送り仮名 書ける (18.5%) まあまあ書ける (49.2%)
 時々間違う (23.8%) よく間違う (8.5%)
- 同音異字や同訓異字 書ける (6.2%) まあまあ書ける (40.0%)
 時々間違う (41.5%) よく間違う (12.3%)

このアンケート結果を参考にしながら、日本語の基礎的知識の定着を図るために、くりかえしそのスキルを学ばせることが大切であると考え。そのために小テストを実施しその定着を図りたい。

- ② 「文章を書く力」を付けるために、書き手の文章表現、文章構成に着目しながら音読、暗唱、朗読することを強調する。

音読の意義について、余郷裕次は、「音読の指導は、情報の氾濫のなか物化してしまっただ言語を生徒の体に取り戻し血肉化する試みでなければならない。日常化、自動化されている文字言語の理解過程 (作品をある意味へ縮約する過程) を虚構テキストのイメージ化によって、いわば出来事として自分の体内に生成する過程とすることに音読指導の目標がある。」³⁾ と述べている。また、山路兵一も大正期において「読むことは読み方教育の出発点であり、終着点でありまた全作業である。読むことに於いて完全であったら読み方教育の仕事はすでに終わりを告げているといってよい」(『読み方の自由教育』1923)³⁾ と指摘している。

更に、余郷裕次は、「戦後、アメリカの言語教育の影響によって黙読が重視された。実際の読む生活を考えれば妥当なことであるが、子どもの読みの能力を把握し、発達させる段階としての音読の機能や国語科指導全体における音読の位置、意義が見直されるべきであろう。教室においては、教師が流暢な音読を求め、学習者も人前では流暢に読むべきという強い概念をもっているという実態がある。まずは流暢な音読という固定概念を捨てて、自分が分かるように読むという理解のための音読から始めるべきであろう。」³⁾ と指摘している。

このように、音読は文章理解のために用いられるものであり、平成 20 年度の『小学校学習指導要領解説国語編』では、音読指導について第 1 学年から第 6 学年まで段階的に指導事項が示されている。小学校で盛んに行われてきた音読が中学校・高等学校では黙読中心の傾向に移っていったのではないかと思われる。黙読も大切であるが、音読をすることで、黙読で読み落とした内容も浮かび上がり、より深い文章解釈ができてくるのではない

かと考える。

保育園や幼稚園、小学校の教育現場では読み聞かせが盛んに行われている。堀 泰樹は、読み聞かせについて「文字を知らない幼児、本を読むのが面倒で読書を好きになれない子どもたち、本のおもしろさを知らない子どもたちに、本のすばらしさ・たのしさを体験させること、それを通して、やがて行うようになってもらいたい「一人読み」へと誘うことが活動のねらいである。」⁴⁾と示している。読み聞かせの利点について、斉藤尚吾によると「目前にいる教師の朗読で、読書力の劣っている子ども、想像力の弱い子どもにも作品の世界をいきいきと描きだすことができる。良い文章の朗読を通して、ことばの感覚が養われ、日本語の快感にひたることができる。教師が子どもの本の選択に詳しくなる。作品のことばの表現や、文体のよしあし、適否などが、読み聞かせによってはっきりつかまれてくる。」⁴⁾と指摘している。

このようなことから学生にとっては、インターンシップ先の各校園で、教育実習で、社会に出てからも教育現場で「読み聞かせ」の技術を求められるのは必然である。

このように、音読、暗唱、朗読のメリットを考えるならば、大学生であってもその機会を増やし、文章解釈・理解に繋げるだけでなく声に出して読む事により、今まで以上に文章に対して注意深く読むようになる。また、書き手の表現の仕方、文章構成、論の進め方にも着目させてみる。そうすることで「文章を書く力」にも繋げていけるのではないだろうかと考える。上記、表3のクラスター分析の結果からも文章読解力を身に付けるための音読指導を心がけるべきであろう。

③ 論理的思考力を育てるためにディベートの体験を積む。

田中美也子は「ディベートは、ルールと論拠に基づく議論である。ディベートによって①多面的なものの見方、②論理的な思考力、③的確で効果的な発言力、④的確に聞き取る力などがはぐくまれる。そして何よりも「話し合いのルール」にのっとって自分の考えを表現し、かつ聞き取ることの大切さが認識できる。」⁵⁾と示している。

このように、ディベートは「話す・聞く」の領域であるが、体験を積むことで、論理的な思考力を育むことができ、「文章を書く力」にも繋がっていくと考えられる。

④ 「文章を書く力」を育てるために推敲する習慣を身に付けさせる。

論理的な文章や文学的な文章を書くためには、「序論・本論・結論」「起・承・転・結」のような文章構成に気をつけることが大切である。

このような文章を書くための練習例としては、自分の好きな新聞記事を取り上げ、その記事について自分の考えや意見を述べたり、文学的な文章では、素話づくりや絵本づくりなどを取り入れて書かせたりすることも考えられる。

出来上がった作品については、自分で推敲したり、グループで推敲し相互批評したりしてよりよいものに仕上げていくことが、「文章を書く力」を育てていくうえで必要不可欠である。

やはり「文章を書く力」を育てるには、時間も手間暇もかかるが、推敲する時間の確保は必要であろう。更に、学生自身が様々なところで文章を書く機会に出くわした時には、必ず文章を読み返すといった習慣を身につけるように指導する必要があるだろう。

⑤ 読書する習慣を身に付ける。

上記、表3のクラスター分析の結果から読む力を高めることが書く力に繋がっていくと

考えられる。そのためには読書をする習慣を身に付けさせることが大切である。授業の工夫の例として、課題図書を読ませて感想文を書かせたり、授業に入るまで10分間の読書タイムを取り入れたり、図書館を利用する回数を増やしたり、授業に関連する図書の紹介について、教員が学生に興味や感心、意欲を持って読ませるための工夫をしたりする等考えられる。

IV おわりに

文章を書く技術は、大学生のみならず、社会人になってからも必要不可欠である。

特に、教員を目指す学生にとっては、日本語を正しく理解し運用することができる力や筋道立った文章が書ける力など、文章を書く能力が求められるのは必然である。

今後の課題解決に向けて、先ず、学生に日本語を正しく使うように意識をもたせるようにする。正しい日本語の基礎的知識や運用力を育てるために、スキルの定着を図るための小テストを実施する。「文章を書く力」を育てるために、書き手の文章表現や文章構成に着目させながら、音読、暗唱、朗読することを強調して取り組む。そして、論理的思考の展開ができるようになるためのディベートの体験を持たせる。論理的思考力を育むためには読書が欠かせない。そのために読書教育についても充実を図る。「文章を書く力」を育てるために推敲する習慣を身に付けさせる。読書する習慣を身に付けさせる。などの着眼点を明らかにすることが出来た。

これらのことは、いずれも文章を書く上での基本的な事項であるが、その定着を一層図ることで、文章を書くことの苦手意識から自信を持って文章を書くことができるようになり、ひいては卒業論文、教員採用試験、就職先の教育現場においても力が発揮できるようになることを確信したい。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説国語科編』 東洋館出版社 p.132・p.134
- 2) 文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説国語科編』 東洋館出版社 p.111・p.113
- 3) 日本国語教育学会 (2001)『国語教育辞典』 朝倉書店 p.33
- 4) 大槻和夫 (2001)『国語科重要用語 300 の基礎知識』 明治図書 p.147・p.185
- 5) 田近洵一 (1984)『国語教育指導用語辞典』 教育出版 p.84・p.168

参考文献

- 長谷川 泉 (1987)『国語表現ハンドブック』 明治書院
- ベネッセ先端教育技術学講座 (2010)『書く力を育てる大学教育』
<http://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/archives/beat/seminar/044.html> 8月12日
- 樺島忠夫 (2002)『文章術―「伝わる書き方」の練習』 文 角川学芸出版
- 国語教育研究所 (2009)『論理的な記述力の開発に挑む―習得から活用へ―』
国語教育No.704 明治図書
- 文部科学省 (2010)『高等学校学習指導要領解説国語編』 教育出版社
- 中村 明 (2007)『悪文 裏返し文章読本』 筑摩書房

- 仁瓶弘行 (2009) 『クラスの子どもたちに「読む・書く・考える力」をともに育む国語授業』
東洋館出版社
- 島田康行 (2012) 『書ける大学生に育てる—AO 入試現場からの提言』 大修館書店
- 山内乾史 (2012) 『学生の学力と高等教育の質保証 I・II』 学文社

Problems in Students' Skills to Write Short Essays and Ways of Improving the Skills

:Through Analyses of Essays Written by the First Year Students

Kayoko Miyazaki

Osaka University of Comprehensive Children Education

It has been said that university students' reading and writing skills have been declined. Some effective measures should be taken in order to improve their writing skills. Accordingly, the present author analyzed the essays written by freshmen of a private university in Osaka. And the findings are the following:

- They are poor at using words and grammars correctly and often confuse spoken language and written language.
- They lack skills to write logically and consequently are not efficient enough in writing according to who they are writing to and what writing purposes they have with.
- They cannot fulfil satisfactorily the required amount of the essays. Neither can be skillful enough to express their main points, and the structures of their essays are poor.

The above are crucial to write effective essays, and must have been taught at elementary school, and junior and senior high school, but are not learned enough.

In order to develop their writing skills, some effective teaching ways should be taken.

These ways must be planned taking the real classroom situation into consideration and proved their effectiveness by analyzing the teaching results.

Key words : investigation into students' writing skills of short essays, ability of abstracting,
ability of constructing essays

(資料)

小論文 課題

次の文を読んで問1, 問2に答えなさい。

自由な遊びは個性発現の温床である。よく言われることだが、欧米と日本の教育とを比べると、小・中学校では日本の方が上だが、大学くらいからだんだん逆転して、大学卒業後の学問研究となると、残念ながら日本は遅れをとってしまう。この原因はもちろん多くの要因がからまっているが、遊びという視点で言うと、欧米では子どものときには自由によく遊んでいて、大学になると急に学ぶことが増えてくる。これに対して、日本の現在は、子どもの頃は勉強々々と言われてすごし、大学生になるとがぜん遊びだす。おそらく、日本の大学ほど勉強しない学生が多いのは、世界でもめずらしいのではないだろうか。

ここで個性や創造性と遊びとの関連で言えば、小さいときの遊びほど自由度が高いと言える。つまり、棒切れが武器になり人になり柱になり、自由度の高いファンタジーと結びつく。これに対して、大学生の遊びとなると、ファンタジーのかかわる部分が少なく、構造化されたなかですることになる。大学生になってから、自分が死んだり生きたり、動物になったり魔法使いになったりする遊びに熱中することはきわめて難しいだろう。それが可能なのは、よほど芸術的なセンスをもった人であろうし、そのような人はそもそもその基礎をなす遊びを幼少時にしているはずである。

幼少時の自由な遊びが、その人の発想の豊かさ、個性を伸ばしてゆく方向の模索などに大いに役立っている。これに対して、現在の日本の教育のように、決められた正しい答を早く知る、ということを幼少のときから訓練されると、小・中・高校くらいまで、「お勉強」はできるかも知れないが、自分の考えを自由に伸ばして創造性を発揮することとは、ほど遠くなる。大学生になってからの「遊び」は、このようなはたらきからは、むしろ関係のない性質をもったものと思われる。

遊びについて勝手な思いつきを言っている、と言われるかも知れない。しかし、筆者は子どもの「自由な遊び」が、どれほど価値あるものであるかを、「遊戯療法」(play therapy)の体験から知っている。われわれ臨床心理士が、さまざまな悩みや問題をもって来談する子どもに対して、誰に対してもあたえる特効薬は「自由な遊び」である。不登校の子ども、チックの症状に悩む子、教室で動きまわって困る子。どの子に対しても、われわれの方法は唯一つ。一緒に遊びの部屋に入って、「50分の間、何をしてもいい、好きなことをしたらいいよ」と言うだけである。「自由な遊び」というのは打出の小槌のようなもので、そこから、子どもたちの個性的な動きが打ち出され、それが問題解決につながってくる。

(中略)

国際化ということがさかんに言われるようになった。経済力においては世界に誇れる日本も、学問の基礎的研究などにおいても創造性を発揮する人を多く育てないと、日本人は他人のアイデアを盗んで得ばかりしているなどという非難を受けることになる。そこで、日本の大学、大学院の教育を充実しなくては、と最近では強調されるようになってきた。しかし筆者は、日本の教育の改変を真剣に考えるならば、子ども時代の自由で豊かな遊びの保証ということからはじめねばならない、と考えている。

(河合隼雄著『臨床教育学入門』[1995 岩波書店]から)

問1 本文の内容を要約しなさい。(200字以内)

問2 本文の内容について、あなたの考えを述べなさい。(600字以内)